**№25　テーマ『人格の深さをつくる』前半**

**講話日2010年2月1日**

**皆さんこんにちは。お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。今日のテーマは、人格の深さをつくる。今年の最初の研修ですので、今年も何回かお話しをさせていただきますけど、よろしくお願いします。去年からずっと人格を磨くテーマでお話を始めたわけですけど、今日のテーマは、人格の深さをつくる。まずいろいろな機会に人格を磨くというのは言われる言葉なんですけども、それは一体どういうことをすることなのか。どうすれば人格を磨くということになるのか。ということについてはあまり考えないで、単に人格を磨くということはこう言われるんですけど。一般的に人格を磨くというと、何かこう道徳や倫理や規則を厳密に守って、正しく生きることができるという状態、というのが人格者だとか、あるいは人格を磨くということの具体的な実践として言われることが多いです。規則を守ることも大事なんですけど、それだけではなんとなく規則に支配されて、窮屈で堅苦しい生き方や仕事の仕方になってしまって、自分自身が自由に羽ばたけるというような感じになりにくいんですよ。本当に人格を磨いて、人間性が輝くというような、命が活発に喜んで活動するという状態になっていかないと、本当に人格を磨くという意味での輝きが出てきません。感性論哲学では、人格を磨くとは、人格の深さ、高さ、大きさというものを目指して、自分が理想に燃えて生きるという状態を指しています。それが実践活動なんだと考えているわけです。**

**人格を磨くためには、まず人格をつくるということが優先されなければならない課題なんです。だけども、すでに人格をつくるということはお話をさせてもらっております。人間が人間の格を持って生きる、すなわち犬猫ではない、人間だ。という基本原理は何なのかというと、みっつあって、謙虚さと成長意欲と愛。このみっつが人間の格というものをつくる基本原理だということをお話しました。命から謙虚さが滲み出てくる。どこまでも自分はもっともっと成長したいという気持ちを持ち続けて、それから血の通った温かな心という愛を仕事の現場でも家庭生活においても見失わない。そういうことが人間の格のある生き方をしているということの証明、根拠になるわけです。そういうことができてくると、だんだんと人間の格が整ってきて、そして人間らしい、人間性のある生き方ができるということになってきます。そういう人間の格をつくった上で、さらに格を磨こうと思ったらどうするかという段階に入って、初めて人格の高さ・深さ・大きさというものが、自分の成長の課題になってくるわけです。人格にはみっつの領域があって、高さ・深さ・大きさ。これもすでにお話をしてあります。前回の復習として申し上げていることなんですが、高さと深さと大きさというものを目標にして、それを自分のものにしていくという努力が、人格を磨くということになってくる。人格を磨けばどうなるかということなんですけど、高さ・深さ・大きさというものは、人に感動を与えるものですので、人格の高さを身に付ければ、そのことによってお客さんやあるいは会社の仲間を感動させることができる。また深いことを言えば、そのことによってもまた周りの人が感動して「なんてすごいやつや」と思ってくれる。商売における営業成績も上がるし、また仲間にも魅力を感じてもらって仕事もうまくいく。また人間の大きさというのも度量が大きい、包容力があるなど、それらが出てくると、またそれなりに大きさという観点から人に感動を与えて、そして多くの人に慕われるというようなことになってきます。人格を磨くということは、仕事の成績を伸ばしていくためにも、また会社内での人間関係において皆から慕われることになっていくためにも、非常に大事なテーマだと言えます。人格を磨くことは決して倫理道徳を厳しく守るような堅苦しい窮屈な生き方ではない、ということをまず心において話を聞いてもらいたいと思います。人格を磨けば人間的な魅力が出てきて、そのことによって仕事がうまくいき、人間関係もうまくいき、また家庭の生活においても家族にも尊敬される。慕ってもらえるような温かな人間性ができてくるということになります。是非この思いを持って人格を磨くということを考えてみてもらいたいと思います。**

**今日人格の深さ、ということなんですが、深さと一体何なのかということです。深さという言葉を国語辞典で引くと、どう書いてあるか。深いこと、浅くないこと、とあり、そんなことはわかっているというような内容です。深いという言葉で引いてみると、11項目の様々な解釈が出てきます。その中に人格の深さを言い当てる、説明するような項目もあるんですけど、なかなか的確にどういうことなのか説明するものが見当たらないのが現実なんです。一応参考にどういう言葉が出てくるかということを聞いておいてもらいたいんですけど、11項目ほどの解釈があって、第1番目は「表面からそこまでの距離が長い」「浅くない」。第2番目は「外から内までの距離が遠い」「奥まっている」。第3番目は「密生している」「草が深い」とか。第4番目は「色、匂い、味などの行為」という意味でその言葉を使う。第5番目は「ときが経っている」という意味。第6番目は「軽率でない」「重々しくない」という意味で使う。第7番目は「浅はかでない」「かりそめでない」。第8番目は「交わりが浅くない」。第9番目は「物事の奥底まで極めている」、人間性とか人格が深いということは物事の奥底まで極めているという言葉が一番近い解釈だと思うんですけど、もうちょっと物足らないところがある。第10番目は「程度が甚だしい」。第11番目は「男女の仲が並以上の関係になっている」という意味で使われる場合もあるなど、11項目の解釈が深いという言葉で出てきます。11個の中で一番人格が深いという意味で使われるならば、「物事の奥底まで極めている」という解釈が一番近いと思うんですけど、だけど実際問題、深いという人間性・人格を持つためには、どういう努力をすれば深い状態になるのか、という解釈というのは国語辞典で出てこないんです。**

**そこで、哲学的に考えて深いとはどういうことなのかということを申し上げると、哲学の立場からは、深さというのは、物事のより本質的で、より根源的な意味や価値を感じ取る力。と言うことができます。我々が人に対して深いとか深さを感じるときは、相手が自分よりも物事の意味や価値についてより本質的なこと言った場合、「なかなか深いこと言うな」「深いな」と感じるわけです。人格の深さをつくっていこうと思ったら、我々は物事のより根源的で、より本質的な意味や価値というものを感じる感性というものを、自分の中につくっていかなければならない。他人よりも物事のより本質的でより根源的な意味や価値を語ることができる力、というものを自分のものにしていかないと、人に深さというものを感じさせる、人を感動させるという人間にはなれないということです。とにかく、人格の深さは物事の意味や価値を感じる力というものに関係している。これをまず考えてもらって、いろんな物事について語る場合、より本質的でより根源的な意味や価値というものを表現できる、そういう自分に成長していくことが、深さを自分のものにしていく努力の内容だということをまず考えてみてもらいたいと思います。**

**物事のより根源的でより本質的な意味や価値を感じ取る力というものを自分のものにしていこうと思ったら、どうしたら良いのか。まず、人間の目は外を向いておりますので、外を向いている間はなかなか深さが出てこない。物事の考え方が浅い、軽薄だという状態で、なかなか深さを感じさせることはできない。深さを人に感じさせるには、外を向いている目を自らの内心を覗き込む、自分の心の中を覗き込む、内省・自省の目をつくっていかないと、深さというものあるいは深いことが言えるという状態にはなりません。自分の心を掘り下げていくことをしないと、なかなか深さを感じさせるような言動というのは出てこないんです。自分の内面が掘り下げられていかないといけない。だから自分の目が外をずっと向きっぱなしでは、なかなか心を掘り下げるということはできませんので、どうしたら一体外を向いている目を自分の心の内面に向けさせて、自分の心をどういう風に掘り下げていくということができるか。そういうことを考えていかないといけない。**

**どうすれば外を向いているものが内心を見つめるものに転換、変わるのか。自分が自分の心を眺めてみるとか覗き込むという状態になっていくためには、物事がうまくいかなくなって壁にぶつかったり、失敗をしたり、問題や悩みにぶつかったり、あるいは人間同士の対立関係が出てきたり、人間関係においても仕事においても、なんかうまくいかないという状況が出てこないと、反省するという自分で自分を見つめてみて、「どうしたらいいか」と悩む状態が出てこない。自分で自分の心を見つめて自分の心を掘り下げていく内省・自省、反省するという機会というものが深さというものをつくっていくためには、どうしても必要なことなんです。一般的には失敗をしたり、物事がうまくいかないとことが、マイナスの要因として捉えられることが多いんですけど、だけど失敗の体験もない、また病気になって苦しむということも体験していない。あるいは勉強が嫌でやけになってしまってという悩みを持ったことはない、とか。問題や悩みにぶつかるということがない人は、どうしても自分を反省することないもんですから、非常に薄っぺらで軽薄で自己中心的で浅い。そういう状況で人生を送ってしまって、結果として深みのない、あまり人に良い感情を与えないような人間性になってしまうことが多いです。**

**そういう意味で、人格を磨く、人間性の成長ということからすると、やはり問題にぶつかるとか、悩むとか、失敗することも決してマイナスではない。それがあって初めて我々は自分自身を見つめてみる。そして反省してみる。そういう機会を持つことができる。失敗するのも、物事がうまくいかなくなるのも、悩みを持つのも、問題にぶつかるのも、苦労するのも、耐える、忍耐するのも、皆人間にとって必要な体験なんだ。それを知っている必要があります。決して失敗したり問題にぶつかったり、悩んだりするときに落ち込む必要はない。それも自分の成長のために必要なことなんだと、そういう考え方というかそういう気持ちをまず持ってもらいたい。もちろん、それらは渦中にいるときは嫌なことなんだけど、それも人生にとって大事な体験なんだという理解の仕方を持っていれば、そういう状況になったときもあまり落ち込まないで、そういうことを契機にして自分が反省して、そして自分を見つめてみることによって成長していく。そういう人間性、人格の内容というものもあるんだと。それも必要なんだという風な気持ちになっておいてもらいたい。自分を責めすぎるということをしないように、失敗も大事なんだ。悩みも大事なんだ。苦しむことも大事なんだ。そうすることによって成長するという領域、面が人間にはあるんだということもよく知っておいてもらいたい。**

**実際問題、大きな失敗をして皆に迷惑かけてという体験した人は、そのことによって同じような失敗をした人の苦しみを本当に心から深く分かってあげることができる。そういう気持ちを持つことができるわけなんですよ。だけど失敗して苦しんだ体験のない人は、人が失敗して苦しんでいても、責める気持ちを持ったり、あるいは「あいつはダメなやつや」と簡単に人間を否定するような、蔑むようなことを言ったり、またそういう目で人を見たり、軽薄な血の通った温かな心を持っていない、冷たい冷酷な人間になってしまいます。でも、深い悩みや苦しみや問題というものにぶつかった人間が、同様のことをした人間に対して本当に心温かな同情、慰めるような気持ちになってあげることができるし、また決して人を蔑まない。「こいつはこのことによって人間としての深さを獲得するような道に入っているんだ」という見方でその人を見つめてあげて、責めないで温かく抱擁してあげる人間にもなることができます。ですので、決して失敗も悩みも、耐えて苦しむことも皆これは自分の人間の成長に関わること。多くの人の気持ちがわかってあげる自分になっていく。人間性の豊かさとか幅が出来てくることになってくるので、非常に大事な体験なんだということを是非を分かっておいてもらいたい。そのことによって自分自身の問題や悩みや失敗ということに対しても、あまり落ち込まないで、自分自身でもそれをちゃんと成長に変えて乗り越えていける。というような状態になりますので、是非そのことを心に置いておいてもらいたいと思います。本当に人生においては何回も「これが俺の人生の地獄か」というような深い大きな悩み苦しみも家庭生活の中でも体験することがありますし、また職場の中でも体験することがあります。これは人間は不完全な存在ですから、誰でも人間である限り、避けて通れない人生の道筋なんです。誰でも何回となく人生において耐え難い苦しみというものに出会いますよ。その際にそのことによって潰れないで、それによって自分に絶望してしまわないで、それも大事な自分の成長の糧なんだと、自分は成長することができるんだという思いを持って、是非問題や苦しみに立ち向かってもらいたいし、また成長する自分というものをつくってもらいたいという風に思っております。**

**とにかく、深さができるためにはスランプに陥る、問題や悩みにぶつかる、失敗する。そういうことが非常に大事なことであって、そのことによって外に向かっている目が自分の内心を覗き込むということに変わる。外に向いている目が自分の内面、自分の心に目が向く。そしてそのことによって反省する、内省する、自省する。それが自分の心を掘り下げていくという活動になりますので、そのことによって自分の内面に深さができていくわけです。そうすると自然に、他人よりも思いやりのある、温かな深いことがいろいろと言える。そういう自分というものがだんだんでき上がってくるわけであります。**

**ということを考えると、深さというのは別の言葉で表現するなら、人が生まれてから今日までに体験してきた苦闘と悩みと努力の質に関係する。とにかく深さができるためには、苦労、悩み、忍耐、努力というものが欠くことができないものである。体験というものが深さというものをつくるんだ。だから、生まれたから今日に至るまでにどれだけの苦労や悩みや努力や忍耐を自分が体験して乗り越えてきたか。それが現在のその人の深さというものをつくる、と言えます。世の中にはいろいろ人生の話を自慢のごとく語るという年寄りがいます。苦労していれば、人間は誰でも深くなるのかというと、そういうわけではないです。苦労の仕方というものがあります。苦労の仕方によっては、苦労することによっては、かえって人間性が歪んでまた人間性が卑しくなって、何かしら自分の苦労を話すことによって相手に同情を買って助けてもらう、卑しい根性になってしまう場合もある。だから苦労したから、必ず深みができてくるというわけでもないんです。苦労にも苦労の仕方というものがある。そういう意味で人間性の深さというのは、生まれてから今日までに体験してきた苦労と悩みと努力の質に関係すると言わなければならない。苦労とか悩みとか努力にもどういう質の悩み方をするか。どういう質の苦労の仕方をするかという問題がある。とは言え、苦労しなければ深さは絶対できない。苦労の質が大きな問題になってくる。**

**でも、努力をしたから深くなるものでもない。しかし、努力しなければ、悩まなければ、深さはできない。問題にぶつからなければ深さはできない。苦労や悩みがあれば誰でも深くなるわけではない。問題にぶつかれば誰でも深くになるかというとそういうわけではない。だから、苦労や悩みに関係するという言い方をしないといけないことになってくるわけです。これはどういうことなのかというと、人間性の深さというのは、植物でいうならば木の根っこ。直接的には目に見えない。地中に深く伸びているもの。人間性に例えれば、深さは木の根っこだ。高さは地上に出ている幹の部分だと言える。木の根は伸びていけばどこかで岩盤にぶつかる。すなわち、問題や悩みにぶつかるということ。木の根であれば、岩盤を避けて通って曲がって行ってもいいんですけど、だけども人間が人生において苦労、問題や悩みにぶつかったときに、それを避けて通ろうとすると、人間においては根性という人間における根が曲がってしまうんです。そうなると、苦労をしても人間性が曲がってしまうので人間としては成長できなくて、かえって嫌味な卑しい根性の曲がった、そういう状態になってしまうんです。これが一番苦労したときに考えなければならない大きな問題なんですよ。苦労、悩みにぶつかったときに「嫌だなあ」と思って、苦労、問題や悩みを避けて通る、逃げる。会社なんかでもいろいろ問題があって、大きな課題が自分に課せられるときに、「嫌だな」と思って避けて通って、楽な仕事ばかり探していると、苦労から逃げるという状態になって弱い人間になってしまう。いろんな問題にぶつかっていって、根性が曲がってしまって、嫌なことは人に押し付けてしまって、楽なことばっかり取ってしまう。結果、嫌な感じの人間になってしまうことになります。そういうことを考えると、人間性の深さというものをつくっていくために一番大事なことは、問題から逃げない。苦労から逃げない。辛さから逃げない。「逃げへんぞ！」という人生に対する姿勢が、実は深さというものをつくっていくために、非常に大事な心構えだと考えなければなりません。**

**だけど、多くの方々が皆幸せを求めているんですけども、幸せというのは苦労がない状態なんだ、幸せとは悩みのない状態なんだ、苦労、悩みがなくならないと幸せにならない、と思ってしまっている人が多いんですよ。早く問題から解放されたい、早くを問題がなくなってほしい、そう願ってそれを幸せだと思っている人が案外と多いんです。よく考えてみれば、苦労、問題がない状態というのは確かに楽かもしれませんけど、だけどそれが本当に幸せなのか。実は、苦労、問題がない状態というのは、実は問題があるのに自分がそれを避けている、あるいは問題があってもそれは見えてない、という浅はかな状態と思われます。苦労、問題がないことを求めていくのは、ある意味で楽がしたい、「易きに流れ安逸を貪る」という心情に陥ってしまう。だからそういう人は当然のことながら、現実の世の中の進歩・発展についていけなくなって、努力するのが嫌だということですから、時代の流れに遅れてしまって、結果としては落ちぶれてしまう。そういう意味では、楽がしたいという気持ちというのは、人生からの逃げだ。仕事からの逃げだ。決して幸せにはなりません。ただ楽ができるだけの話なんだ。仕事がなくなったら楽かと言えば、生きていけませんから。必然的に貧困のどん底に陥ってしまう。生きていけない。どうしたって人生を楽しく生きていこうと思ったら、幸せに生きていこうと思ったら、やっぱり収入面からみても、自分に降りかかるいろんな難題というものを引き受けて、逃げないでそれを乗り越えて処理していく生き方をしていく以外にないわけです。決して問題がなくなった状態を幸せだと思ってはならない。早く苦労、問題から解放されたいと思ってはならない。それは実は不幸になる道筋、堕落への道筋。問題が出てこないことを願うのは、仕事からの逃げであり、人生からの逃げだ。そういう意味で問題と悩みから逃げない気持ちを自分の中につくっていって、どんな問題でも逃げない、「どんな問題でも俺に任せておけ。俺が何とかする。心配するな」と仲間・部下を安心させて、そして生きていく人間になろうと思ったならば、なぜ問題は出てくるのかということをちゃんと知る必要がある。**

**なぜ問題が出てくるのか。会社なんかでもいろいろクレームがあって、消費者からいろいろと不平不満を言われる場合もあると思うんですけども、会社に寄せられるクレーム、あるいは不平不満は実はどういう風にその会社が努力したら会社が発展するのか、どういうことに注力していったら良いのかを消費者が教えてくれているということ。問題というものは、とにかく常に人間と会社と社会を発展成長させるために出てくる。決して問題と悩みは人を苦しめるために出てくるんじゃない。出てきてくれていると言っていいほど大事な現象なんだ。実際問題、問題も悩みもないという状態になれば、今のままでいいんだということなりますから、会社も発展しませんし、人間の成長しませんし、社会も停滞します。社会においては毎日、毎日犯罪が起こり、事故が起こり、いろんな事件が起こるんですけど、それも全部社会を発展させるために必然的に起こってくる現象なんだ。問題がなければ、あるいは犯罪、事故もなければ、社会は発展しない。停滞する。このままでいいんだとなりますから技術も発展しない。何も良くならない。現在のままだ。だけど犯罪があるから「どうしたもんだろう」と考える。事故があるから「どうしたらこんな事故が起こらないようにできるか」と考えて技術も発展する。そのようにして歴史はつくられていくことになるわけです。そういう意味では、犯罪すら世の中を成長させるために必然的に出てくる現象なんだ。人間が不完全である限り、永遠に犯罪はなくなることがない。人類が滅びるまで犯罪と事故はあり続ける、存在し続ける、出続ける。それにより社会は発展するんだ。**

**だから我々は、問題や悩みが起こることを恐れてはならない。起こることによって初めて会社も発展する。どういう風にしたら我が社は発展するのかということを教えてくれるのが、会社の外部から会社に寄せられるクレームであり不平不満である。また会社の内部で起こる人間関係も様々な問題も、会社の内部で起こる様々な事務的な事故や事件なんかも、どういう風にしたら会社が素晴らしくなるのか、どこに努力したら良いのかを教えてくれるために起こっている。犯罪とか事故とか悩みとか問題というのは、これは人間が自ら求めるものではない、求めずにしてやってくるもの。求めずにしてやってくるということは、人智を超えた計らい、天の、神仏の計らいとしてやってくる、自分に降りかかってくる。人間の作為的な浅はかなものではなく、もっと深い意味がある。自分に降り掛かってくる問題というのは、「君がこういう問題を乗り越える力をつくることによって、今より一段上の人間に成長できるんだ」「こういう問題を乗り越えていく力をつくる努力をしろよ」ということを自分に教えてくれる。それが自分の身に降りかかる問題や悩みの意味であります。会社もよく見つめれば、社外からいろいろ言われることに誠実に答えていく。また会社の内部から起こる様々な問題を誠実に逃げないで受け止めて、それを処理していることによって、確実に会社は素晴らしい発展を遂げるんですよ。問題や悩みが何をしたら会社が良くなるのかというテーマを与えてくれる。社内外で起こる様々な問題も悲観してはならない。マイナスではない。問題が起こってくれないと、成長しないんだから。どうしたら会社が発展するのかを教えてくれるために出てきてくれているんですから、問題はありがたいと思って受け止めていかなければならないし、問題を起こした人間にも感謝しなければならない。「君が問題を起こしてくれることによって、我が社が持っている大きな欠点、落ち度が明らかになりました」「君が事件を起こしてくれなかったら、会社の大きな問題点がわからなかったんだから、君が問題を起こしてくれたこともプラス、良かった」と考えなければなりません。そういう大きな心で問題を受け止めていって、そして問題を皆で力を合わせて乗り越えていきましょう。ということです。それが現実的な会社の発展の仕方であります。**

**問題が起こらないようにと思ってはならない。むしろ問題が起こって初めて、どうしたら成長できるのかが分かってくるんだから、別に無理に問題を起こしてくれと言う必要ないんだけども、決して問題が起こることをマイナスと考えない。問題が起こることが成長のエネルギーになるんだと受け止める。問題がないことを願わない・問題から逃げない・問題を恐れない。それらを意識して、そういう社風、そういう仕事の仕方を是非皆さんに持ってもらったら、そうすると仕事も楽しくなります。また仕事をする目標がそういうところから出てきますので、強い体質の会社になっていくと思います。問題に苦しめば苦しむほど、それを乗り越えたときの成長は莫大だ。すごいということも考えなければならないんですよ。そういう意味では、問題、悩み、苦しみというものは、あらゆるものを成長させるために天が、宇宙が人間に与える愛の試練だ。愛ゆえに問題や悩みは自分に与えられるんだというほどの考え方をしなければなりません。**

**家庭の問題もそうですよ、会社の問題もそうです、全て問題は愛なんだ。なぜそんなことが言えるのか。命というものは、宇宙の摂理の力によって地球上につくられたものですけど、その命を天・宇宙が進化成長させるためにどんなことをするのか。母なる宇宙は生んだ子なる生命の我々を進化させるために環境の激変という問題をつくって与えるんです。環境が激変する…これは生物にとっては生存を懸けたもの。全生物が絶滅するかもしれないという大きな苦しみであり、課題なんです。それがなかったら、命は進化しない、成長しないという問題なんですよ。だから、ご承知のようにガラパゴス諸島の生物たちは、生きた化石と呼ばれる。海に囲まれているから環境が激変しない。だからあのガラパゴス諸島の生物たちは、生きた化石と言われているのです。何万年前の古い命の形をそのまんま、そのまんま東と申しましょうか、さんまのまんまでずっと引きずって、今日まで生き続けている状態なんですよ。進化しない。だけど、環境の激変に襲われた地域の生物たちは、確実に環境の激変ごとに命の形を変え、新しい能力を獲得して、進化していくという道筋を辿るわけであります。そのことを考えても、環境の激変というひどい苦しみすらも、母なる宇宙が子なる命を成長させるために、発展させるために親が子に与える愛の試練だ、と言わなければならないわけであります。まして我々が人生においてた体験する程度の問題は、全生物が絶滅するかもしれないものに比べたら軽いものですから。だから我々が人生において受ける苦しみぐらいは、当然のことながら自分を成長させるために母が与えてくれる愛の試練だ。愛ゆえの課題なんだと受け止めて、我々は問題を恐れずに立ち向かっていって、逃げないという気持ちを是非持ってもらいたいと思います。**

**とにかく、苦しみがない、悩みがない、問題がなかったら我々は成長しない。苦しみ、問題、悩みを乗り越えていくことによってしか人間は成長しないし、実力というものは問題を乗り越える努力を通して、初めてつくられるものなんですよ。実力というのは、命に痛みを感じるような問題を乗り越えないと、命は実力というものを持てません。実力というのは、命が苦しむ、肉体が苦しむということを通して、初めて実力はできるんですよ。利己的な活動を通して初めて実力はできてくる。意識や理性が成長してもそれは観念であって、実力ではないんですよ。実力というのは肉体が参加しないとできない。命に痛みを感じないと、本当の成長はないんです。どれだけ大学で高いレベルの教養、知識、技術を身につけてきても、それは観念であってまだ実力とは言えない。会社に就職して、実際仕事をして仕事の中で成果を出して、初めて頭の中のいろんな知識は現実の社会で通用する実力に変わる。肉体を動かす作業というのは、実力をつける上で大事な課題であります。現実の娑婆社会の中でいろんな仕事をすると、必ずいろんな大きな問題にぶつかる。なかなか自分が思うように現実は動かない。本当の悩み、問題にぶつかって、「どうしようか」と言って問題を乗り越えていくと、実力ができてくる。本当に現実を強く生き抜いていく力、実力がそこでつくられていく。**

**命の痛み、命の苦しみを通さないと本当の生きる力、本当の実力というのはできない。是非人生を生きる考え方として、問題や悩みは早くなくなってもらいたいという浅はかな願いは持たないようにしてもらいたい。問題や悩みが出てこないというのは、実は不幸への道筋なんだ。貧困・貧乏・堕落への道筋なんだ。決して問題が出てこないように願ってはならない。問題がなければ成長できない。悩みがなければ強くなれない。実力を伴った成長はできないんだ。人知を超えた母なる宇宙の愛の計らいとして、自分の身に降りかかる問題や悩みから逃げない。自分を成長させるために出てきてくれているものから逃げてどうするんだ。それに立ち向かっていってこそ、お母さんの期待に応えられる。お母さんが与えてくれるものから逃げたら、お母さんを悲しませる。それは堕落への道だ。人生というのは、自分の身に降りかかる問題を乗り越え続けていくことによって、生きる力・実力をつくっていく。それが人生の道筋だ。人生とは問題を乗り越え続けることである。仕事をするということも問題乗り超え続けることである。それによって初めて成長が可能なんだ。**

**そう考えると、人間性、人格の深さをつくっていくために一番大事な教訓は、逃げたらいかん。そういう人生に対する姿勢が深さをつくってくれるための大事な気構えだと言うことができます。**

**仏教なんかでも悟りというものを求めていく、そういう修行ですけども、仏教の修行なんかでも一番大事な悟りとは何なのか。一番根底になければならない悟りとは、「一切皆苦」という悟りなんですよ。一切皆苦だと悟ると、悟りの土台ができるんです。一切皆苦。これが仏教の悟りの土台。仏教の悟りというのは、深さをつくっていくための道筋と言うことができるものなんですけども、段階でも4つあって、四法印という言い方をするんです。辞書なら簡単にすぐ出てきますから、知りたい人は辞書を引いてもらいたいんですけど。4つの段階を踏んで仏教の修行は成長し完成されると言われています。その第一段階目の悟りが、「一切皆苦」。上によく言われるところの「諸行無常」。その上に「諸法無我」。最後は「涅槃寂静」。そういう段階で人間の意識は成長する、悟りは成長すると言われ、考えられています。**

**悟りの一番土台になるものが、「一切皆苦」。人生とは苦しみなり、ということを悟らないと、本当の素晴らしい人生を生きる力はできないぞというんです。人生は楽しまなくてはとか、楽しい、楽というものを思っていると、ちょっとした苦しみでもものすごく重たく感じてしまう。ちょっと苦しくなるともうダメだと思って諦めてしまったりなんかして、結局は落ちぶれてしまう。しかし、人生は苦しみなり、ということを悟ると、おしんのように「こんな苦しみはへっちゃらだ」となってしまって、人生=苦しみなのだから、どんな苦しみが来ても「それが人生じゃないか」ということで、あまり深刻にならない。絶望的な気持ちにならない。どんな問題でも引き受けて生きていける。そうすると、強い気持ち、生きる力が湧いてくる。**

**自分の内面、内心を見つめること、内省・自省が重要だということの根拠、証明というのは、人類の歴史の中で人間性の深さというものができた時期というのは、中世の時代と言われています。中世の時代というのは、欧米ではキリスト教が世界を支配した時代であり、また東洋においては仏教が人々を支配したというか、仏教という宗教が発展していた時代が中世。実は宗教と文化の中で人間が生きて生活していた時代に、実は人類における人間性の深さがつくられたんです。なぜそうなのかというと、欧米においてキリスト教が発展した時代というのは、常に自分の意識の中に神という意識があって、人間は騙せても神は騙せない、という気持ちで自分がどういうことをしているときでも、自分がどういう気持ちでいるときでも、神の目から逃れることができない。そういう意識を持っていたものですから、常に神の目によって自分を見つめられているという気持ちから、神の目を通して自分の気持ち自分自身、自分の行動を見つめて反省するということが行われていた。だから、欧米人の人間性の深さというのは、中世のキリスト教の文化の中でつくられたものだと言われているんですよ。だから現在でも欧米人がつくる芸術作品、文化やいろんなものに表現されている深さは、キリスト教の信仰とバイブルの中に原点があるんです。シェイクスピアの劇作にしても、トルストイの小説にしても、その中に出てくる言葉や行動における深さを表現するものは、全部聖書・バイブルが出典になっているわけです。**

**欧米人の文化においては、中世の時代に人間としての心が深く掘り下げられていた。深く掘り下げられていった人間性を持つことができたがゆえに、欧米人はルネッサンスから近代にかけて高さを持った科学技術文明をつくることができたんだ、と言われているわけです。すなわち、高く飛び上がるためには、深く屈伸をしなければならない。それにより、深さに応じた高い文明を近代に欧米人の手によってつくられたんだ、と理解されているわけなんですよ。そういう意味では、自分自身が高さという本当に自分の成長を遂げていこうと思ったら、まずは自分を深く掘り下げて、そしてそれに応じた高さがつくられていくエネルギーを蓄えなければならない。そういうことが人間性の成長においても言うことができるわけです。**

**日本人の、日本民族における人間性の深さというものも、実は中世の時代・平安時代につくられたんですよ。平安時代というのは、仏教精神がずっと庶民に至るまで行き渡っていたという時代でした。中世において日本人は、仏の目から見れば自分の心がいかに卑しいか、貧しいかも考えて、非常に深さのある意識を平安時代につくったんです。だから現在でも、紫式部の源氏物語というのは世界最高峰の恋愛文学と言われて、「なんであんな平安時代に日本人が、現在でもそれを超えることができないと言われるような深い心理描写をすることができたのか」「あんな源氏物語のような素晴らしい恋愛文学をつくることができたのか」ということが不思議だと言われているんです。だけども、人間の心の心理状態を細かく描写し表現するということができたのも、実は仏教という宗教の中で仏の心と自分の心を見比べて、いかに自分の心が浅はかで、罪深いかを見つめていったから。内省・自省の意識の働きというものが、あれほど心理描写・心理表現というものができる力を日本人につくった、とも言われています。**

**実際問題、平安時代に日本民族は民族として、魂の根源に至るところまで自分を見据え尽くした。であるがゆえに、鎌倉から室町にかけて独特の日本文化の真髄と言われるような文化が湧き出てきたんです。また平安時代までは、朝鮮半島、中国大陸からいろんな文化を受け入れて学ぶとことが主でした。鎌倉から室町にかけては、日本民族独特の精神性が吹き出てくるような状態になった。いわゆる日本文化の高度さがつくられていった。実際問題、鎌倉時代になってから日本仏教と言われる、海外から学んだ仏教を超える、個性的な日本的な仏教がつくられて、法然、親鸞、日蓮…いろんな個性的な僧侶が出てきて、独特の教典をつくりました。**

**また建築なんかでも鎌倉時代に至っては、書院造という簡素な美学と言われるものがつくられた。それが将来、茶室の原型となっていった。また日本建築の土台をつくったんです。他の地域には無い、独特の日本の建築様式ができ上がってきた。刀でも日本刀と言われる人を斬るためだけではなく、芸術作品と言われるのが鎌倉時代につくられている政宗の名刀もそうです。鞘を払って刃を自分の目の前にすることによって、磨き抜かれた研ぎ澄まされた鋼の味わい、輝きあるいは鋼の模様が自分の心を鍛える、ということで人間の心を鍛えるための芸術作品としての刀剣がつくられた。こんな刀は日本以外の他の国にはどこにもないんです。そういう芸術作品もつくられた。**

**また仏像なんかも木彫の仏像で外国から入ってくる粗野なものだったところを、日本人が鎌倉時代につくった運慶快慶の木彫の仏像というのは、本当に芸術作品と言われるような感動的な仏像がつくられました。20世紀の話ですけども、フランスの大哲学者であったカール・ヤスパースが日本を訪れて弥勒菩薩を見たときにどういうことを言ったかといったら、「弥勒菩薩様の表情、お顔の相というのは、これは人間が到達しうる最高の表情だ。こんな素晴らしい顔相というのは、相当深い罪を犯した人間でなければ、こういうお顔にはなれない」と言って感動されたんです。罪を犯して、深く自分の心の内面を見据え続けて養われた、そういう血の通った温かな人間性が、こういう表情をつくるんだと。不完全な人間というのは、自分の不完全さに目覚めて、自分を深く反省して謙虚さが滲み出てくるときに初めて、穏やかな本当に人を責めない包容力のある心温かな、全てを許せるような見事な表情になるんだと。よほどの深い罪を犯さずにして、こういう見事な表情にならないと言って感動された。それほどの芸術作品を鎌倉時代において生み出した。そういう流れの中から、侘び寂び幽玄という美学がつくられていって、江戸時代の様々な芸術に反映されていった。茶道、歌舞伎、能とか。いろんなものにそれが表現されていった。**

**日本人がつくった独特の日本文化の見事さも実は、平安時代に深く日本民族が自分の心の内面を掘り下げていったがゆえに、その深さに応じた高さとしての日本文化が、鎌倉・室町・江戸という段階でつくられていった。そういう意味においても、自分自身の内面を掘り下げていくという作業は、ものすごく人間の成長のために大事な課題だと言わなければならない。自分自身の内面を深く掘り下げていく、心を掘り下げていくために、どうしても自分自身の理性の目で心を見つめなければならない。それが、素晴らしい人間をつくってくれる。その自分自身の心を掘り下げていくために必要なことが、失敗である。失敗をすることである。苦しむことである。悩むことである。問題にぶつかることである。これが自分の心を掘り下げて、血の通った温かな心遣いができる人間性をつくってくれることになる。それはお客さんに対したときも、同僚に対したときにも出てくるし、仕事の仕方においても出てくる。**

**私の家で改築をしたときに、来てくれた大工さんに感動したのは、お経の如く「どうしたら喜んでもらえるかな、どうやったら喜んでもらえるだろうか…」と仕事をしているんですよ。一つひとつ丁寧に仕事をしてくれた。非常にそのときは感動しました。そういう自分の仕事に魂を込める。「どうしたら喜んでもらえるかな、どうやったら喜んでもらえるだろうか…」と、言葉を口走りながら作業をしている。それは心の中から抑え難きものとして出てきているということ。そういうことも大工さんのこれまでの仕事歴の中で、自分に言い聞かせながら仕事をしなければならないような失敗談とか、体験あったからだと思うんですよ。その結果、そういう仕事の仕方ができる人間性に成長されたのではと思って、大工さんの顔の中に刻まれた苦しみとか悲しみというものを感じましたし、結果としてこんなに成長されたんだと思って感動しました。**

**とにかく、逃げないという、苦しみ、悩み、問題を避けて通らない。逃げない。それを引き受けてそれを乗り越えていく。そういう仕事に対する姿勢、人生に対する姿勢を自分のものとして持ってもらいたいし、決して悩みや問題がなくなることを幸せとは思わない。問題や悩みがなくなることを幸せと考えるのは、楽がしたいだけの人生だ。逃げの人生だ。人間における本当の幸せというのは、問題と悩みを乗り越える実力をつくることにある。それでしか本当の幸せは手に入らない。「どんな問題でも俺に任せとけ。俺が何とかする。心配するな」と周りの人に言ってあげることができる人間が、自分を幸せにできるし、周りの人も幸せにしてあげることができる。そういう力を持つのではないかと思うんです。というところで前半のお話は終わって、10分間休憩をします。どうもありがとうございました。**